

# 甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

No. 105 March 1994

## 日本産ハムシダマシ科について (1)\*

益本 仁雄

### はじめに

ハムシダマシやゴミムシダマシなどの甲虫は、形態の変異の幅が広く捉えにくい仲間である。種や属あるいは族などの分類に使われる特徴、たとえば体のアウトラインや点刻、毛や色彩などに関して、個体差や地域差などの変異がきわめて多い。そのため、しばしば実は同一種であっても別種に見える。また、種を細分化しようとすればきりなくできそうでもあり、まとめれば大ぐりにもなる。どのあたりで線を引くのかが大変むずかしい。また、ただ1頭の標本（とくに♀）で、正確な同定をすることは困難なことが多い。できるだけ多くの個体と各地の標本を見ることによって、種や種群の様子がわかり、広がりや変異がつかめる。検索表の作成をこころみても、変異がそれぞれの範囲を越えてしまうことがしばしばあり、クリアカットなものをつくることがきわめてむずかしい。それらのことを前提として、以下の概説を読んでいただきたい。

### 1. ハムシダマシ科の概要

ハムシダマシ科の甲虫は、ゴミムシダマシ科にきわめて近縁で、最近では、その1亜科または1族とされることが多いが、ここでは、従来のようにヒラタムシ上科の1つの科として扱うことにする。形態的特徴としては、体は細長い。しばしば後半がやや拡がり、頭部は前方に突出し、前基節は突出し非常に狭い前胸腹板突起によって隔され、前・中・後付節の数は5-5-4形式で、末端前節が二叉状に広がり下側が海綿状になっていて、触角は糸状かわずかに太まり、末端節はしばしばきわめて長い、等があげられる。BORCHMANN (1910) によると551種、中條道崇 (1985) によると2,300余種が世界に分布しているという。葉上や花

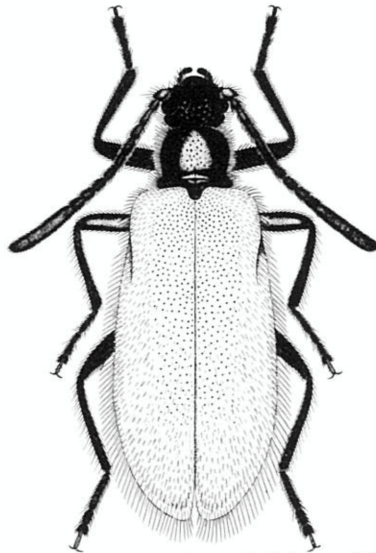
\* Kimio MASUMOTO, On the Japanese Lagriidae (1)

上、小低木の幹や朽ち木などに見られる。

### 2. 日本産種の分類に関する研究について

まず、MARSEUL (1876) は日本から4新種 *Lagria rufipennis*, *L. vervex*, *L. decora*, *Statyra rufobrunnea* を記載した。LEWIS (1879) は日本の甲虫カタログで5種あげている。SCHÖNFELDT (1887, 1897) は、同じくカタログに初め5種、のちにさらに7種を加えた。LEWIS (1895) は、4新種 *Eutrapela robusticeps*, *Arthromacra viridissima*, *A. sumptuosa*, *A. higoniae* に加え、1新属 *Macrolagria* と2新種 *M. fujisana*, *M. hirsuta* を、さらに翌年 (1896) には2新種 *M. rugipennis* と *Lagria notabilis* を記載した。BORCHMANN は、カタログ (1910) やモノグラフ (1915, 1936) で日本産の種にふれている。PIC (1914) は奄美大島から、1変種 *Anisostira rugipennis* var. *farrii* を記載した。河野 (1920) は、台湾なども含めた日本のハムシダマシを再検討し、1新種 *Arthromacra apicalis* を記載した。中條 (1959) は、琉球から1新種 *Anisostira elegans* を記載し、3種を記録したが、のち (1970) に先の新種について言及している。中根 (1963) は、奄美大島から1新種 *Arthromacra amamiana* を記載したが、同年、北隆館の図鑑に11種を掲載している。中條道崇 (1985) は、琉球から1新亜種 *Cerogria (Cerogria) notabilis okinawana* の記載と、中條 (1959) の種を、台湾の種の synonym にした他、同年、保育社の図鑑で、13種を図示解説した。

益本 (1987) は、日本産ハムシダマシのすべての種の見直しをおこなった。過去に記載された種のタイプを可能な限り検し、原記載にあたった。その結



*Lagria nigricollis* HOPE, ♂ (Y. IMURA del.)

果、属の族の変更、新種記載、新結合、昇格、同物異名、lectotypeの指定などをおこなった。写真や図などのほか、関連文献リストも収録しているので、必要ならば昆虫学評論第42巻(増補)37-60頁を参照していただきたい。

日本産ハムシダマシ科 Lagriidae の  
族および属の検索表

- 1 (2) 前基節は互いに接近していて、前胸突起は欠如するかきわめて小さく薄い。♂の触角末端節はきわめて長い。体はしばしば後方に拡がり、鞘翅は通常条刻されず、かなり密に点刻され多少なりとも皺状で、しばしば密に毛を装う。(ハムシダマシ族 Tribe Lagriini) .....ハムシダマシ属 Genus *Lagria* FABRICIUS
- 2 (1) 前基節は前胸突起によって隔される。♂の触角の末端節は、しばしば長くなるが前族ほどではない。体は大抵細長く、鞘翅は点刻条溝があり、まれに密に毛をよそおう。(ナガハムシダマシ族 Tribe Statirini)
- 3 (4) 鞘翅は密に点刻されるがしばしば横に皺状となりほとんど点刻条溝がない。背面は金属的な光沢がある。.....アオハムシダマシ属 Genus *Arthromacra* KIRBY
- 4 (3) 鞘翅は点刻条溝がある(ときに粗く不規則に点刻がある)。背面は、金属的でなくガラス状の光沢がある。
- 5 (6) 前胸は4角(とくに前角)が顕著に角ばる...ナガハムシダマシ属 Genus *Macrolagria* LEWIS
- 6 (5) 前胸の4角は顕著には角ばらない。
- 7 (8) 前胸背板は点刻され、鞘翅は粗く不規則に点刻される。♂の後腿節の形状は複雑化している。.....シワハムシダマシ属 Genus *Anisostira* BORCHMANN
- 8 (7) 前胸背板は点刻されず、鞘翅は規則的な点刻条溝がある。♂の後腿節の形状は単純。...ズマルハムシダマシ属 Genus *Casonidea* FAIRMAIRE

BORCHMANN は、アオハムシダマシ属をハムシダマシ族に含めているが、体形や、前基節の形状、後翅脈の状態(図1-9参照)などからナガハムシダマシ族に含めるべきである。

なお、先にふれた通りこの仲間は、形態の変異の幅が大きいため検索表に述べたことはおおよその特徴とし、これに執着せず先に進むことが肝要である。

I. ハムシダマシ族 Tribe Lagriini

日本には、琉球を含め、ハムシダマシ属 *Lagria* 1属が分布している。BORCHMANN はケブカクロハムシダマシ *Lagria notabilis* LEWIS を *Cerogria* 属とし、中條道崇もこれにしたがっている。真の *Cerogria* であれば♂の触角が特異な形状(図10-12参照)をしているが、同種では単純であり明らかにハムシダマシ属である。ただ、*Cerogria* 属は台湾を含

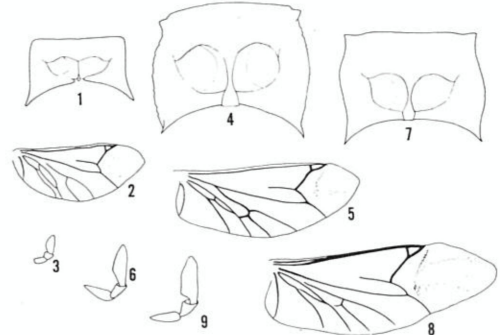


図1-9. 1-3. *Lagria rufipennis* MARSEUL. 4-6. *Arthromacra decora* (MARSEUL). 7-9. *Macrolagria rufobrunnea* (MARSEUL). 1, 4, 7. prothoraces; 2, 5, 8. hind-wings; 3, 6, 9. maxillary palpi.

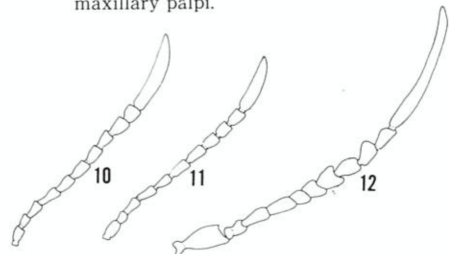


図10-12 Male antennae.

10 *Lagria notabilis* LEWIS. 11 *Lagria okinawana* (M. T. CHŪJŌ). 12 *Cerogria* sp., Taiwan.

め、広く東南アジアに分布しているので、琉球には生息していてもおかしくはない。

日本産ハムシダマシ属 Lagria の検索表

- 1 (4) 頭胸背板は通常黒褐色、鞘翅は黄褐色~赤褐色。体は小型(5.5~9.5 mm)で、後方への拡がりあまり強くない(♂ではやや平行)。日本本土やアジア大陸に分布。
- 2 (3) ♂: 体の両側の次種に比べ平行的。複眼は極端に大きく、強く両側に突出し頭部にも深くはまり込み、眼間距離は複眼の横直径の約0.3倍。触角の先端は鞘翅の中央に達し、末端節は触角の半分近くの長さに達する。♀: 頭胸背板の点刻は次種より密でない。鞘翅は次種に比べ広がらない。体色は♂♀ともしばしば次種より薄くなる。5.5~7.5 mm. 日本; サハリン。.....ハムシダマシ *Lagria rufipennis* MARSEUL
- 3 (2) ♂: 体の両側は前種に比べ平行的でなく、複眼は並みの大きさで、眼間距離は複眼横直径の約1.2倍。触角の先端は鞘翅の基部1/3に届き末端節は触角のおよそ1/3の長さ。♀: 頭胸背板は前種よりいくぶん強く密に点刻される。鞘翅は前種に比べ強く広がる。♂♀とも、体色はしばしば暗色となる。7.5~9.5 mm. 日本; 朝鮮, 東シベリア, 中国。.....ニセハムシダマシ *Lagria nigricollis* HOPE



- 4 (1) 頭胸背は鞘翅とほぼ同色。体はより大きく(8.5~11.5 mm), 後方により強く広がる。琉球に分布する。
- 5 (6) 体はより大きく(10.5~11.5 mm), ほとんど黒色。鞘翅は粗く点刻され、強く不規則な皺状となる。奄美大島。……………ケブカクロハムシダマシ *Lagria notabilis* LEWIS
- 6 (5) 体はより小さく(8.5~10 mm), 赤褐色~暗褐色。鞘翅は普通に点刻されほとんど皺状にならない。沖縄本島, 与那国島。……………ウルマクロハムシダマシ *Lagria okinawana* (M. T. CHŪJŌ)

***Lagria nigricollis* HOPE**  
ニセハムシダマシ

*Lagria nigricollis* HOPE, 1843, *Annl. Mag. nat. Hist.*, 11: 63.

次種とよく似ていてとくに♀では区別がつきにくい。より大きく幅が広く、色彩がより暗色である。♂は、複眼が大きくなく、触角末端節の触角全長との比が前種より小さい。中根および中條道崇の図鑑写真の♂個体は、次種であると思われる。なお、和名は佐々治(1988)にしたがった。

分布: 日本(北海道, 本州, 四国, 九州, 伊豆諸島など); 朝鮮, 東シベリア, 中国。

基準標本の所在: 自然史博物館(London)。

***Lagria rufipennis* MARSEUL**  
ハムシダマシ

*Lagria rufipennis* MARSEUL, 1876, *Annl. Soc. ent. Fr.*, (5) 6: 337.

*Lagria verveux* MARSEUL, 1876. *Lagria nigricollis*: NAKANE, 1963; M. T. CHŪJŌ, 1985.

前種とよく似ているが、明らかに別種である。MARSEUL は九州産3♀により本種を記載し、同じく1♂で *Lagria verveux* を記載したが、両者は同一

種にはかならない。河野は、*L. verveux* を *L. nigricollis* の synonym としているが、これは誤りである。前種より普通に見られる。なお、学名と和名の組合せが図鑑と異なることに注意されたい。また益本の論文で、*L. verveux* の type の写真(p. 55, Fig. 59)が♀となっているが、♂のミスプリントである。

分布: 日本(北海道(礼文島, 奥尻島も含む), 本州, 四国, 九州, 屋久島など); サハリン。

基準標本の所在: 国立自然史博物館(Paris)。

***Lagria notabilis* LEWIS**  
ケブカクロハムシダマシ

*Lagria notabilis* LEWIS, 1896, *Annl. Mag. nat. Hist.*, (6) 17: 341.

本種を BORCHMANN は *Cerogria* 属に移し、中條道崇もこれにしたがっているが、♂の触角の構造が単純であるのでハムシダマシ属であることがあきらかである。また、中條道崇は保育社の図鑑にハムシダマシ族の検索表を掲げているが(P. 342), “クロハムシダマシ属 *Cerogria*” の記述は、同じ理由からいって正しくない。

分布: 奄美大島。

基準標本の所在: 自然史博物館(London)。

***Lagria okinawana* (M. T. CHŪJŌ)**  
ウルマクロハムシダマシ

*Cerogria (Cerogria) notabilis okinawana* M. T. CHŪJŌ, 1985. *Mushi*, 50 (4): 88.

前種の亜種として記載されたが、体はより小さく細く、体色はより明るく、触角の末端節はより短く、鞘翅は普通点刻は粗くなく、皺状にもならない。また、♂交尾器の形状も異なり、独立種としてあつかうべきである。

分布: 沖縄本島, 与那国島。

基準標本の所在: 九州大学。

(神奈川県横浜市)

○カツラの樹洞にいたオカモトツヤアナハネムシ  
オカモトツヤアナハネムシ *Tosadendoroides okamotoi* KONO の生活史は、蟹江(1990)によって明らかにされた。それによると、本種の幼虫は暗く、多湿な場所にあるブナなどの古い倒木中に見出されるという。一方、露木(1992)は、ヒメシャラの生きている倒木の幹上から本種幼虫を得、ヒメシャラ生木との関連を示唆した。

筆者は、1993年6月27日、三重県飯高町国見山で、カツラ大木の根元にできた樹洞中に本種♀1個体を見出した。この個体は、樹洞の内側面に静止していたもので、ライトを照射して発見した。

この樹洞内側はかなり湿っており、表面は黒褐色に柔らかく朽ちていた。生木に生じた樹洞内部は、倒木などに較べ、非常に長期間にわたって同様の環境が維持されることから、本種の安定した発生地となりえるものと考えられる。

ところで、ヒメシャラの古木にはかなり高率で樹洞が生じることから、上記露木氏の観察例も、ヒメ

シャラに樹洞があったのかもしれない。

文末ながら、いろいろ御教示いただいた蟹江氏に感謝したい。

参考文献

- 蟹江昇, 1990, 昆虫と自然 25 (4): 20-23.  
露木繁雄, 1992, 甲虫ニュース (98): 4.

(三重県久居市, 秋田勝己)

○道志山地のオサムシの採集記録

1993年9月28日, 道志山地・鹿留(ししどめ)山, 標高1600mにて、下記のオサムシ2種を採集したので報告する。

ヒメクロオサムシ(秩父山地亜種) *Leptocarabus harmandi okutamaensis* (ISHIKAWA), 2♂♂。

フジクロナガオサムシ *Leptocarabus arboreus fujisanus* (BATES), 1♂1♀。

この2種の混棲地はいままで知られていなかったため、注目に値する。

同定確認していただいた石川良輔氏に深謝する。

(神奈川県横浜市, 蕭 嘉廣)

## 図鑑中の新名に関する黒沢君の一文について 中根 猛彦

本誌第102号に黒沢君が平山修次郎著「原色甲虫図譜」を中心として図鑑中にある新名を拾い出して、その有効性と命名者について述べているが、彼の主張はともかくとして文中には2,3誤解を招くような記述もあり、また命名規約の解釈についても気になることがあるので、敢て私見を述べておくことにしたい。

図鑑の中で新名を与えるべきではないとか、図鑑での命名は正式な記載とは認められないという意見は、日本では以前からよくいわれてきたことである。私も「原色昆虫大図鑑II」を執筆した際に結果的に多数の新名が必要になったので、Fragmenta Coleopterologica に記載を發表したが15種(約10%)はとうとう發表できないまま今日に及んでいる。これらについてDr. KLAUSNITZERからは正式な記載の手助けをしようと申入れがあったし、Dr. WANATからは正式な記載について問合わせがあったところを見ると、海外でも同様な考えがあるようである。しかし命名規約を読んでみても、そのような制約は見当たらないし、広く公表するという意味では他の出版物よりはるかに優れている。n. sp. などの表示が入れられればより確かであろうが、これらの表示は勧告になっていて必須条件ではない。

以上からすれば図鑑中の新名も厳密な意味では少々問題があるが、適格と考えられないことはない。そこで問題なのは命名者のことであるが、新名の命名者はその出版物～論文の著者であるかどうかという点である。日本では誰かが調べて命名した新種を他の人が發表した場合、その種の命名者は發表した人であるとされており、黒沢君の所説もこれに依っている。これは江崎教授(東大・理・動物学、私の20年先輩)が命名規約の解説の中で強く主張されていることによると思われるが、命名規約を読むと必ずしもそうとはいえないのである。

命名規約第50条(命名者)の(a)には次のように書いてある。命名者とはその名をはじめて適格の基準を満たす形で出版した人である。しかし出版物の内容から共著者中の1人または他の誰かだけが、その名と基準を満たすことに責任があることが明かであれば、その人が命名者である。もし命名者が出版物の内容から判定できないときは、命名者は無名と見なされる。

上のうち適格(有効性)の基準というのは難かしくみえるが、要するに2名法にしたがい学名の形が整っていれば良いわけである。こうしてみると図鑑にしても論文にしても、その中にある新名の命名者は、それがはっきりしていれば著者でなくてよいのである。論文の中での新種に共著者の1人あるいは著者以外の人の名が命名者として付けられているのは、しばしば見受けられることであって、もしn. sp. などの表示がなかったとしても無視できないの

ではなからうか。

平山著「甲虫図譜」の中にある新名の命名者となっている三輪・湯浅両博士は巻頭文によれば種名の調査に協力されたことが記されており、とくに湯浅博士関係分については博士の記載發表前に公表したことが付記されている。したがって、これらの新名はその時併記された命名者と共に有効と考えてもよいのではないかと考えられる。著者が自身に献名するという不自然な形はこれによってさけることができるだろう。著者自身は命名する意図を持っていないのである。

江崎教授は新種などの命名については、かなり寛容であって、正式の形式でなく文中に新名のあるときでも有効とされたように思うが、ある人が新名を与えたものを別人が公表した場合については、きわめて厳しかったように思う。古い命名規約の教授の訳にも、命名者の名:第21条に「学名の命名者とは、その名を表示、定義又は記載と共に最初に公表した人であるが、その出版物の内容によって、他の人がその名及びその表示、定義又は記載に対して責任のある事が明かである場合はこの限りでない。」となっているので少々不可解であるが、敢て推測するならば、当時北大の松村教授が新種を量産され、同定依頼者に新名をつけて回答されたことに対する牽制であったように思われる。

よく例にひかれる *Gymnetron miyoshii* の場合、三好(1922)の原論文を見ると *Gymnetron miyoshii* Mats. n. sp. と明記されており、松村教授に同定を依頼した結果上記の名で新種であるとの通知を受取ったことが記され、いずれ教授が發表されるだろうとある。命名者をわざわざ Mats. から MIYOSHI に変える必要があるのだろうか。道義上からも好ましいこととは思えない。それにしても当時この小さなゾウムシの所属を正確に決めた松村教授の博識には感心させられる。

ところで「甲虫図譜」中のテントウムシの新名であるが、私は以前湯浅博士をお訪ねしたとき、これについて伺ったことがある。博士は無断で新名の2種が載せられたことには憤慨しておられ、「自分は記載を發表しないから命名者は HIRAYAMA になるだろう。うっかりこういう名前でも付けようかと伝えたのが失敗だった。」とっておられた。私は大図鑑執筆の際に命名者はやはり YUASA であるべきではないか、と考え湯浅博士の名で記載を用意した。故人の論文や遺稿が發表されることはそう珍しいことではないし、学名の安定にはそれがよいと思ったからである。文中には私の名は一切入れてないから、黒沢君がわざわざ引用に私の名を入れているのは穏当ではない。

なお黒沢君は私が湯浅博士の後輩でもあり弟子でもあった、と記しているが、博士は東大・農・農学



卒で直接の先輩ではなく、師事したこともない。始めてお目にかかったのは博士から日本昆虫図鑑（改訂版）のことで相談があるとお便りがあった直後、確か京都の学会の時である。この時は図鑑の分担者の分担種数の配分を依頼され、以後数回研究所のお部屋を訪ね、貴重な文献を拝借したぐらいである。当時は新制大学が続々とできた頃で、「どこか教授のポストはないのかねえ」と心配して下さったのと、私が京都に移ること（江崎教授の紹介による）をお話したとき、行先が徳永教授がいる大学と知って気分を悪くされ「そんな所へ行くのは止めるように、行くのなら今後のことは知らない。」といわれたことが記憶に残っている。一体何が教授との間にあったのか知らないが、私は湯浅博士を尊敬している。長く生きてほしい方だった。

「原色日本昆虫図鑑」(上)は伊賀・林・阪口の3君がはじめから関係しており、私が参加する条件として近畿甲虫同好会編となり、大倉・後藤ほかの人達が加わった。しかし既に図版は用意され校正刷も大部分できていた。初版には新種新型の英文記載がはいっており、*Agrilus sachalinensis* OBENBERGER var. *yokoyamai* IGA もその一つである（脚註の英文

記載には var. *yoRoyamai* となっているが本文中では *yokoyamai* と綴られている）。黒沢君はこれを *A. sinuatus* の亜種とし命名者を自分に変えているが、図鑑では var. として記載されているので命名者は IGA でなければならない。黒沢君はなぜか ab. として引用しているが誤りである。伊賀君は黒沢君と同年のタマムシ好きで互に連絡をとっていた間柄であり、もし ab. であったなら *yokoyamai* は無効名となるのだから友人として *igai* とか *masahiroi* とか新名を与えるべきではなかったろうか。黒沢君が横山氏に献名する必要はなかったと思う。文献の引用には注意してほしいものである。

本稿を書くのに当っては黒沢君のあげた参考文献のほか、下記を参照した。

江崎悌三, 1930. 動物命名規約. 岩波講座 生物学 (特殊問題), 40 pp.

三好浩太郎, 1922. ミヨシタマゾウムシ *Gymnetron miyoshii* Mats. n. sp. に就き. 昆虫世界 26 (8): 3-8.

International Code of Zoological Nomenclature, London, 1961 (訳本とも), 1964 & 1985.

(1993. 8. 8.)

(千葉市花見川区)

#### ○北海道北東部で得られたゲンゴロウ 2 種の記録

エゾヒラタヒメゲンゴロウは、森, 北山(1993)によると、北海道では稚内市, 豊富町(サロベツ原野), 厚田村, 幌延町, 石狩町など日本海側からのみ記録され、本州からは青森県からの記録があるとされている。本種をオホーツク海の近く、斜里郡小清水町から得ているので記録しておきたい。又、北海道では確実な記録の少ないシマゲンゴロウも内陸部から得られているので、併せて記録しておく。学名は森, 北山(1993)に従った。

エゾヒラタヒメゲンゴロウ *Colymbetes* sp.

1♀, 斜里郡小清水町倉栄, 26. VI. 1992 (ブラックライトへ飛来)。1♂, 斜里郡小清水町浜小清水, 11. VI. 1993 (浅い人口池を掬って採集)。河原進採集。

雄交尾器の形態は、森, 北山(1993)の図示したものとよく一致した。

シマゲンゴロウ *Hydaticus bowringii* CLARK

1♂1♀, 北見市柏木, 24. VI. 1992, 加藤敏行採集(田圃を泳いでいたものを採集)。1♀, 北見市富里, 5. VI. 1992, 1♀, 29. VI. 1992, (ダムの水銀灯へ飛来), 柳谷卓彦採集。2♂♂6♀♀, 北見市上仁頃, 26. VII. 1993, (田圃脇の水銀灯へ飛来), 柳谷卓彦採集。

標本は柳谷氏が採集されたものは同氏が、それ以外は加藤氏が保管している。末筆ながら採集記録の公表を快承された、北見市北網圏文化センターの柳谷学芸員、又、色々御教示頂いた松本英明氏に感謝する。

#### 参考文献

森正人・北山昭(1993) 図説 日本のゲンゴロウ, 217 pp.

+12 pls. 文一総合版, 東京。

松本英明(1993). 北海道のゲンゴロウ採集. 昆虫と自然, 28 (8): 8~13.

丸屋良博・樋口誠(1993). ヒラタヒメゲンゴロウの採集について. 昆虫と自然, 28(8): 30~31

(北海道北見市, 加藤敏行; 同斜里郡, 川原 進)

#### ○チンメルマンセスジゲンゴロウの記録

チンメルマンセスジゲンゴロウ *Copelatus zimmermanni* GSCHWENDTNER はまれな種で、五島(福江島), 琉球(トカラ中ノ島), 中国南部からの記録が知られている。筆者は、本種を秋田県南部より採集しているので報告する。秋田県からは筆者の知るところで未発表の記録も含めると数例あるがいずれも県南部に位置している。また本種は極めて局地的な生息をしている所もあり、道路を挟んで生息を分けている所もあった。しかし生息している所においては、かなりの数の本種を確認している。現在は南北極端な採集記録となっているので今後他県からの追加記録も予想される。

18♂♂13♀♀, 秋田県由利郡象潟町石名坂, 26. IV. 1992.; 2♂♂3♀♀, 象潟町石名坂, 12. X. 1992.; 1♂2♀♀, 象潟町石名坂, 7. III. 1993.; 3♂♂, 象潟町向山, 18. V. 1993. いずれも筆者採集。

採集状況は雪どけ水と雨水が溜まる池で水草があり、その根際をすくって得られたが、池の法面や湿地化した場所の土中からも多く得られた。また1993年冬(2月)には同池は水がはっていたが、氷下の枯れた水草をすくってみたところ数は少ないが本種の確認ができた。

末筆ながら、ご多忙中にもかかわらず本種の同定をして頂いた佐藤正孝博士に厚くお礼申し上げる。

## 参考文献

佐藤正孝, 1985. 上野俊一, 黒沢良彦, 佐藤正孝(編著)  
原色日本甲虫図鑑(II): 183-201.

Masataka SATO, 1985. The Genus *Copelatus* of Japan.  
*Trans. Shikoku Ent. Soc.* 17 (1-2): 55-67.

(山形県酒田市, 高橋 誠)

## ○アリヅカムシをオサムシトラップで採集

筆者はオサムシ採集用のピットホールトラップでアリヅカムシを多数採集した。野村周平博士の御教示によると, 多数のアリヅカムシがオサムシ用のトラップに入ったことは極めて稀な現象であるとのことであるが, 日頃より貴重な御教示を戴いている堀繁久氏は, 以前からこのような方法で採集している。採集したアリヅカムシは以下の通りである。

ムネトゲアリヅカムシ亜科 (Batrisinae)

1. *Batriscenellus fallax* (SHARP), 4♂♂18♀♀
2. *Batriscenaulax longipes* JEANNEL, 19♂♂46♀♀, 千歳市駒里 18. VI. 1993.

トラップ液は1.5%程度の濃度の酢酸液を使用した。付近の環境はミズナラ主体の広葉樹林で, 林床にはシダ類, ウバユリ等が見られた。腐食土層は薄く, それ以下は火山灰が堆積している。トラップ数は50個, 設置期間は1週間である。

末筆ながら標本の同定結果をお知らせいただき, 発表を勧められた野村周平博士と, 採集方法を御教示戴いた堀繁久氏に感謝する。

(北海道江別市, 宮下公範)

## ○アシボソコキノコムシを南ア広河原で採集

アシボソコキノコムシ *Mycetophagus obsolete-signatus* MIYATAKE は, 宮武(1989)によれば, 長野県稲子湯産のタイプ標本が知られているだけの極めてまれな種とされている。多比良(1984)は本種を南アルプス(静岡県)の広河原および樺島から記録し, 「原記載以後初めての記録と思われる」としている。筆者は本種を山梨県側の芦安村広河原で採集した。基産地と多比良の記録地の中間点ではあるが, 至近距離にある韮崎市鳳凰山の甲虫の精査(水野・細田, 1991)によっても本種は得られていないことを考慮し, 分布資料として記録しておきたい。



1ex., 山梨県中巨摩郡芦安村広河原, 30. VI. 1991,  
筆者採集・保管。

本誌102号に報告したヒラヤマコブハナカミキ

リを採集したのとはほとんど同じ大樺沢左岸の広葉樹林内で得られたもので, 高さ3m程度の広葉樹立枯につるがからんでヤブのようになったところを叩き網したところ落下したものである。

## 文 献

宮武睦夫(1989)日本産コキノコムシ科. 昆虫と自然. 24 (1): 8-15.

水野弘造・細田倅市(1991)鳳凰山産甲虫類目録(山梨県韮崎市). 関西甲虫談話会資料. 2: 1-153.

多比良嘉晃(1984)静岡県に産するコキノコムシ科甲虫. 静岡の甲虫. 2(2): 49-56.

(神奈川県川崎市, 芳賀 馨)

## ○山形県のコガシラミズムシ4種の記録

山形県におけるコガシラミズムシ科については, 大津<sup>4)</sup>の目録では1種のみが掲載されているにすぎない。筆者は近年, 水棲甲虫類の調査を進めているが, コガシラミズムシ科の4種の生息を確認できたので報告する。

1. コガシラミズムシ *Peltodytes intermedius* (SHARP)

本種は広く県内の平地に生息しているようで, 池や沼及び休耕田の草むらに多い。

酒田市: 宮海(4exs., 25. VIII. 1989, 田圃の畦)

余目町: 最上川河原(5exs., 25. VII. 1991, 水溜)

遊佐町: 吹浦海岸(1ex., 26. V. 1991, 海岸の塵芥)

新庄市: 土内川(1ex., 17. VII. 1991, 休耕田)

鶴岡市: 大机(6exs., 1. IX. 1991, 池)

平田町: 山谷(5exs., 5. V. 1993, 休耕田)

鮭川村: 木根坂(2exs., 16. V. 1993, 水溜)

西川町: 岩根沢(5exs., 9. VI. 1993, 田圃の畦)

酒田市: 飯森山(38exs., 18. VIII. 1993, 休耕田)

分布, 北海道, 本州, 四国, 九州; 中国, 台湾<sup>2)</sup>

2. チビコガシラミズムシ *Haliplus japonicus* SHARP (写真A)

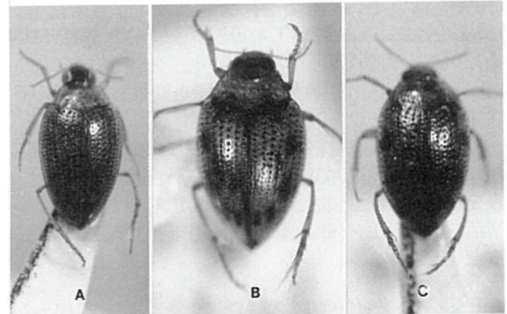
本種は前種に比べてやや山地の冷水に多いようである。

櫛引町: 長坊山(49exs., 27. VII. 1991, 沼)

遊佐町: 三ノ俣(2exs., 19. VIII. 1991, ダムの岸辺)

温海町: 神馬沢(4exs., 15. IX. 1991, 休耕田)

遊佐町: 直世(30exs., 19. IX. 1993, 川の岸辺)





流水で採集できたのはこの場所のみである。分布、北海道では普通で、本州ではほとんど記録がない<sup>2)</sup>。

3. クロホシコガシラミズムシ *Haliplus basinotatus* ZIMMERMANN (写真B)

局地的に生息する種類のように、一カ所からのみ(山地)の確認である。

大蔵村: 今神 (2exs., 17. VIII. 1993, 沼)

分布、九州, 本州; 中国<sup>2)</sup>

4. マダラコガシラミズムシ *Haliplus sharpi* WEHNCKE (写真C)

局地的に生息する種類のように、一カ所からのみ(平地)の確認である。

酒田市: 飯森山 (25exs., 10. VIII. 1993, 休耕田) 分布、本州, 四国, 九州; 中国<sup>2)</sup>

なお、本種の同定に関しては、ヒメコガシラ、クビナゴコガシラ、キイロコガシラ、エゾチビコガシラの標本を佐藤敦氏・神垣匡伸氏より借用して、比較検討することが出来た。記して感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 佐藤正孝, 1984, 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書き, I. 甲虫ニュース (65): 1-4.
- 2) 佐藤正孝, 1985, 原色日本甲虫図鑑 (II) コガシラミズムシ科, 108-181.
- 3) 中根猛彦, 1985, 日本産ヒメコガシラミズムシ属の再検討, 北九州の昆虫 32 (2): 61-67.
- 4) 大津 高, 1991, 山形県産淡水産動物目録: 123.

(山形県酒田市, 櫻井俊一)

○石垣島のヤエヤマホソジョウカイモドキの記録

ヤエヤマホソジョウカイモドキ *Igdia flavicollis* REDTENBACHER は佐藤 (1985) によると日本では西表島のみに産し、石垣島からの記録はない。筆者は本種を石垣島で採集しているので記録しておく。



1♂, 沖縄県石垣島屋良部岳, 21. II. 1990., 1♂, 石垣島伊土名, 3. III. 1990., 1♂, 石垣島野底, 11. III. 1990., 4♂3♀♀, 石垣島平久保, 16. III. 1990, いずれも筆者採集。

西表島産の標本と比較してみたが特筆するほどの形態的差異はないようである。本種はそのスマートな体型がジョウカイモドキ科甲虫のなかでは特異的であるが、上記産地の野底では本種と同時に色彩、体型ともに類似しているキムネカミキリモドキも得られている。両者が擬態関係にあるかどうかはわか

らないが、興味深い事実として報告しておく。

なお、上記の標本はすべて倉敷市立自然史博物館に収めてある。

末筆ながら、文献についてご教示いただいた名古屋女子大の佐藤正孝博士に厚くお礼申し上げます。

引用文献

佐藤正孝, 1985. 日本産ジョウカイモドキ科の分類学的覚え書き I, 甲虫ニュース (70): 1-5.

(倉敷市立自然史博物館, 奥島雄一)

◇大会報告◇

日本鞘翅学会第6回大会は1993年11月21日に東京大学農学部1号館において開催されました。

総会において各担当幹事からの活動報告が行なわれましたが、今年度は大きな承認事項はありませんでした。その後東大医学部, 養老孟司教授による「人と自然について」という招待講演がありました。

自然というものは本来人間が予測統御できないものであることから、社会の枠の外にあるものが自然として扱われてきた様子を、社会の枠が時代と共に変化する事との対比において紹介されました。また人の脳は実在感のないものは理解できないため、自然の大切さを実在感として理解できない人々が増加するにつれて、さらには加速度的に自然破壊が行なわれてゆくことを指摘されました。世の国々もすでに自然を壊してしまった国(中国やイラク, イギリス等)とまだ壊していない国(日本, アメリカ等)にわかれ、それによって物の考え方や哲学が左右されている事を紹介されました。この講演は人と社会と自然を時間, 空間を越えた視点から把握するものであり、当日会場で回覧されたサンプル標本も含めて、大変貴重なものでありました。

この後、一般講演となり、川下貴氏による小笠原の甲虫と自然の紹介がありました。小笠原の甲虫たちの多くのスライドが氏の知見とともに次々と紹介されたが、氏によってはじめてその生態が明らかにされた虫達も少なくありません。

続いて斉藤秀生氏によるカミキリムシの目録・分布情報のデータベース化に関する講演があり、一連の目録・分布情報の流れとデータベース化への近況が報告されました。

この後、恒例の同定会が開かれ、盛会のうちに閉会しました。

大会終了後、「梅ずし」で行なった懇親会には約50名の会員が参加、今一度の盛り上がりとなって解散しました。(大会担当, 大木 裕)

◇例会報告 (I)◇

1993年第4回例会を12月19日(日), 午後1時30分より, 上野の国立科学博物館2号館4階, 実験講義室にて行いました。講演は久保田正秀による「本州におけるエゾオオネクイハムシとババオオネクイハムシの分布について」と畑山武一郎氏による「ヒメハナノミの話」の2題。大阪から来ていただいた畑山氏の話は、難解とされるヒメハナノミの分類に関して示唆に富み、今後の研究の進展が期待さ

れます。講演終了後は一人一話。参加者は 38 名。

なお、長い間例会会場として利用させていただいた国立科学博物館 2 号館は取り壊され、新しく生まれ変わることになったそうで、この会場を使った例会は今回が最後となりました。

例会終了後、会場を「鳥正」に改めて忘年会を行ないました。例会とは若干顔触れが異なりましたが、出席者は例会と同じ 38 名。恒例の文献オークションで盛り上がり、名残惜しく散会しました。

講演の畑山氏、オークションにご協力いただいた方々に感謝申し上げます。(例会担当、久保田正秀)

◇お知らせ◇

本学会の財政は、この数年、前年度の繰越金を減らしているのが現状です。諸物価の高騰が原因ですが、さらに本年 1 月からの郵便料金の値上げによる送料の支出増が追い打ちをかけることになりそうです。今のところ繰越金の額は充分ですので、会の運営自体に支障はありませんが、現状のままでは、会を今より盛り上げていくことが難しくなります。

そこで、このことについて 1994 年 1 月 15 日に行われた常任理事会で検討した結果、1995 年度から会費を値上げ(現行の ¥5,000 から ¥6,000 に変更)する方向で対処することになりました。これは、正式には幹事会(非常任幹事を含む幹事会)の承認と、本年 11 月の総会での議決の後に決定されることですが、会員の皆様には、前述の会計報告と合わせてご覧いただき、会の実状についてのご理解をいただければ幸いです。(会計担当、齊藤明子)

◇例会報告(2)◇

1994 年第 1 回例会を 3 月 5 日(土)、午後 1 時 30 分より、新宿の国立科学博物館分館研修棟大講義室で、科博開催の「自然史セミナー」との合同により行ないました。講演は齊藤明子氏による「カミキリムシ雌交尾器による高次分類」。齊藤氏長年の研究成果の発表で聴き応えのある講演でした。講演された齊藤氏にお礼申し上げます。参加者は 21 名。  
[編集後記]

102 号より 1 年間代理を務めました編集を、次号より妹尾幹事にお返しします。今号で昨年 10 月までに受理した原稿を掲載しました。11 月以降受理したものは妹尾氏に引き継ぎます。4 月以降の投稿は〒196 昭島市昭和町 2-5-15-601 妹尾俊男宛にお願いします。(例会担当、久保田正秀)

◇会計報告◇

1. 1992 年度決算 (1992 年 1 月 1 日～12 月 31 日)

収 入	予 算	決 算	差引増減額
前年度繰越金	4,600,000円	4,653,192円	53,192円
会 費	2,300,000	2,509,500	209,500
広 告 費	100,000	60,000	△40,000
出版物売上金	84,000	84,000	0
大会会場費	0	72,000	72,000
雑 収 入	0	100,215	100,215
寄 付	0	100,000	100,000
合 計	7,084,000	7,578,907	494,907

支 出	予 算	決 算	差引差額
会誌印刷費 (Elytra)	1,600,000円	1,415,385円	184,615円
会誌印刷費 (甲虫ニュース)	400,000	806,900	△406,900
会誌送料	550,000	655,103	△105,103
通 信 費	120,000	188,497	△68,497
事 務 費	100,000	70,342	29,658
大会会場費	30,000	0	30,000
予 備 費	50,000	0	50,000
次年度繰越金	4,234,000	4,442,680	△208,680
合 計	7,084,000	7,578,907	494,907

2. 特別会計 1992 年度決算

収 入	支 出
前年度繰越金	903,541円
次年度繰越金	905,884円
利 息	2,343
出版物売上金	0
合 計	905,884

日本鞘翅学会

会費(一カ年) 5,000 円、次号は 1994 年 6 月下旬発行予定  
 発行人 渡辺泰明  
 発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1  
 国立科学博物館昆虫第 1 研究室  
 電話 (3364) 2311, 振替 東京 8-401793  
 印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6 号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6  
 振 替 東京 (3) 21129  
 電 話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)  
 F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥7,000、桐合板製インロー型標本箱大 ¥2,500、送料一箱につき都内及第一地帯: 4 個以下 ¥1,600、5 個以上 ¥1,000 (以下同様)、第 2 地帯 ¥1,800、¥1,100、第 3 地帯 ¥2,000、¥1,250、其他、各種器具、針などを製作販売。カタログを御請求下さい。(¥62)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25  
 電 話 (03) 3811-4547, 振替 6-113479